

2009年2月28日開催 RISS/IR3S/SDC シンポジウム

「持続可能なデザインとは」ー環境、安全安心、人や伝統からのアプローチー
～More with less; A Transition toward Sustainable Design～

文責：末永恵(大阪大学サステナビリティ・サイエンス研究機構 特任准教授)

【シンポジウム概要】

デザインの視点で持続可能な地域社会のあり方を考える動きは、重要だが新しい分野です。その中で注目されているのがサステイナブル・デザインというものです。単なる技術やエネルギーだけでなく都市や歴史・伝統を視野に入れて、環境やサステナビリティ（持続可能性）の諸問題の必要性を追求するもので、21世紀の課題はこのサステイナブル・デザインを通して、多分野・異分野の知恵や考え方を統合することにあるといわれています。本シンポジウムでは、持続可能社会の鍵を握るといわれるデザインの視点からサステナビリティを考えます。

【基調講演】「アート&デザイン：持続可能な世界の構築に向かって」



南條 史生 森美術館館長

講演要旨)

アートは環境問題の課題や問題を喚起することを可能にし、「環境問題は文化の問題」であると主張。自然の素材やリサイクルした材料で作られた芸術品や建築、あるいは環境汚染、地球温暖化など環境をエコロジーとし、環境に対する警笛を鳴らそうとするものの国内外の例を紹介。エコカーなどで機能一辺倒でない「最高のデザイン」を投与させることがエコの認識を高め、普及させることにもつながると説いた。結果、デザインが淘汰されない商品は長く使われ、結果的に環境への負荷を減らすことができることから、「デザインの持続可能性」を追求すべきと提案した。

【招待講演】「Honda Design—モビリティの新しい価値創造に向けて—」



海老澤 伸樹 株式会社本田技術研究所常務執行役員

講演要旨)

自動車の抱える問題を提示し、その中で求められるデザインの果たす役割について講演。今後、特に、アジアを中心に自動車の増加が見られ、世界的に広がる環境問題への対処が急務となっている自動車業界の現状を紹介。同社が世界で初めて環境対策のマスクー法をクリアした事例を紹介し、今後、多様化するエネルギーを効率よく活用する技術が必要になってくると強調。その中で、CO₂削減技術は、ガソリンエンジンの効率アップ、燃料のよいディーゼル改良、ハイブリッド車や電気自動車、さらには燃料電池車の実用化に取り組んでいると強調。デザインが、車両のアップ化においてパッケージングや空力性能などで貢献し大きな役割を担っていると、その重要性を説いた。

【招待講演】「デザイン政策の変遷—制約の自覚と共生に向けて」



細野 哲弘 経済産業省製造産業局長

講演要旨)

国のものづくり政策にかかわる立場から、国のデザインとしての位置づけであった「輸出デザイン法」の成り立ちと同法律廃棄の日本のデザインの成熟化を紹介。グッドデザイン賞を創設した通産省（当時、現・経産省）の時代を経て、2008年度からサステナブル・デザイン賞を立ち上げ、大量生産・大量消費を促すだけでなく、「良いものを長く使う」という価値観と、デザインを人や都市、歴史の観点から考察するサステナブル・デザインの重要性を力説した。その中で、人を介した「もの」「感性＝心」のあり方を重視し、感性による創造の構築の推進を提案。日本の感性、伝統の素晴らしさを今後、今年にはNY、来年は上海万博で紹介することになっていると日本のものづくりの基礎をサステナブル・デザインで考える国の方向性を示した。

【招待講演】「持続可能な社会を目指して」



高遠 秀典 トヨタ自動車株式会社グローバルデザイン統括部担当部長

講演要旨)

Zeronize (事故などのネガティブをゼロに) & Maximize (楽しみや快適性などポジティブな点を最大限に) を高次元で両立させた「サステナブルモビリティ」の実現を目指す重要性の中で、それをいかにハイブリッドや燃料電池車の魅力を高めるデザインに到達させるかが目標と力説。これは、環境・エネルギー問題や交通事故、交通渋滞などクルマが社会に与えるネガティブインパクトを最小化「ゼロナイズ」と同時に、クルマの楽しさや快適性、利便性などポジティブインパクトを最大化「マキシマイズ」という考え方である。負担を「ゼロナイズ」する、そういう新たなデザインを発信していくことが使命と考える。それには日本人が元来持っている、自然、人、物を慈しむ心、「慈愛の心」をもってデザインしていくべきではないか、と同社が提唱する「J-factor」の意義を強調した。

【招待講演】「YAMAHA のグローバル戦略ーデザインがコミュニケーション」



川田 学 ヤマハ株式会社デザイン研究所所長

講演要旨)

ヤマハのデザイン哲学を、「Integrity (本質)」「Innovative (創造的)」「Aesthetic (美しいデザイン)」「Unobtrusive (でしゃばらないデザイン)」「Social Responsibility (社会的責任を果たすデザイン)」の5つであると紹介。その中で重要なのは、楽器が中心ではなくて、人がいて、始めて成り立つという哲学。そこには日本の古来の精神、美意識が介在する。人とももの関係には、「こころ」が潜在し、道具 (楽器) と人はパートナーシップで結ばれ、人生の良きパートナーであるということ。商品はおのずと長く使えば朽ちるが、使うと使うほど、価値が増すデザインこそが、サステナブル・デザインに通じ、そこには「愛する」という人の感性が見出されていると力説した。

【招待講演】「地球の感覚神経系をデザインする」



竹村 真一 京都造形芸術大学教授

講演要旨)

地球を人間と同様、一つの生命体としての捉え方から、いかに、地球を可視化するかがテーマであると考え。手塚治の話为例に、宇宙から地球をみることによって始めて地球の現状を客観視できるようになるのではないかと氏の考えから、地球にいても、地球を客観的に見えるようITやグラフィックアートを駆使して作った「触れる地球」を紹介。2002年にプロトタイプを初めて提案し、洞爺湖サミットでは展示を行ったことを説明。大きな意味でのデザインとは、地球をデザインすること。地球 Literacy を広めることが重要で、地球にいても地球を客観的に理解できることがポイント。「地球体の神経系」を活用して、ソーシャル・デザインが可能となり、等身大でコミュニケーションしながら（地球を実感しながら）世界の可視化が可能となってきたことを紹介した。

【トークライブ】



要旨)

サステイナブル・デザインとはどういうものか？というシンポジウムのメインテーマについて自由討議。人間の原点に戻って、伝統だけでなく、新しいものにも伝統を作る気概が必要であるとともに、機能主義や普遍主義偏重から、使いこむことで価値を持つというデザインのコンセプトこそが重要。そこには、物と人（心）の相互関係があり、それを考えることがサステイナブル・デザインにつながるのではないかと。サステイナビリティは、いまや世界の要請で、このような要請・条件を考慮しつつ、文化、技術、哲学を問わず広義における考察が重要という視点で一致した。

トークライブ後には、以下の「JAPAN サステイナブル・デザイン宣言」が採択され、以下を報告書に記すことで合意した。

今回のシンポジウムは日本初の試みで、サステイナブル・デザインの重要性を内外にアピールするもので、その方向性を示した重要な会議となって閉幕した。

「JAPAN サステイナブル・デザイン宣言」

①機能主義や普遍主義偏重から離脱し、都市や歴史、文化・伝統といった視野をあわせて物や社会を設計する。

②日本の自然や風土を礎とした技（わざ）を介在させたデザインで、「もの」と「心」を融合させる。

③文系、理系を橋渡しする新しい豊かな発想や哲学を生かしたデザインを目指す



講演者



講演風景



トークライブ風景



講演風景



講演風景

